

愛川高等学校令和6年度第3回学校運営協議会・第2回評価部会議事録

開催日 令和7年3月5日（水）13：30～14：30

出席者 石田 裕昭（神奈川工科大学経営管理本部企画入学課担当理事）

今井 信一（桜美林大学高大連携アドバイザー）

橋崎 友聰（愛川高等学校PTA会長）

瀧 喜典（愛川町教育委員会指導室長）

藤元 貴嗣（愛川高等学校校長）

高間 明浩（事務局）

勅使川原 真由美（事務局）

大越 亜希子（事務局書記）

欠席者 西坂 雄一郎（愛川町青少年指導員）

林 繁（愛川高等学校同窓会長）

大石 進（地域学校協働本部「明日楓会」会長）

1 会長挨拶（石田 裕昭 氏）

2 学校評価部会・地域連携部会報告（副校长より）

資料：令和6年度学校評価報告書

○教育課程・学習指導

- ・リクルート社の「スタディサプリ」を活用して朝学習を実施している。また、毎週2時間「i-Unit」という授業でもスタディサプリを活用し、個の学力に応じた学習を行っている。結果、学習習慣を身に付ける習慣づくりに繋がった。来年度は全学年でスタディサプリを活用する。
- ・朝学習やi-Unitでの課題提出率は目標75%を達成した。
- ・授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができたという肯定的な評価が目標値85%に達した。
- ・大石様より「目標を達成できたことは評価できると思う。来年度に上手くつながるとよい」というコメントをいただいている。

○生徒指導・支援

- ・「年間60回以上遅刻」という基準が適切かどうかは疑問が残るが、今年度1月末日時点では昨年度より減少しており、目標を19%としたが、16.4%であった。朝学習の取り組みや生活習慣の改善が減少に繋がったと思われる。
- ・令和6年度の連携生の入学生が定員45名のところ37名の入学であったが、例年並みの人数で連携活動に取り組むことができた。
- ・地域防災部門では、愛川町にあるコピオで、防災キャンペーンに参加した。3月にAEDの研修会が残っている。
- ・中高連携活動のうち、県の予算削減のため、貸切バスを手配できず、東京農業大学で実施していたものづくり部門の継続が難しくなり、急遽、8月末に国際理解教

育・租税教室を開催した。中学生9名連携生2名の参加があった。今後は、愛川高校内で取り組み、かつ中学校のニーズに合った企画を考える必要がある。

- ・大石様より「連携生の数は減少したが、ボランティア、中高大連携講座やインターネット・シップへの参加の数字を見ると、良く頑張っているのではないか。連携生以外の生徒の参加を増やす取組は、来年度の課題としてもらいたい。」というコメントをいただいている。

○進路指導・支援

- ・授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた」の肯定的な評価は83.6%であったが、企業からの協力を基に多くのガイダンスを実施して職業観を育成することができた。
- ・2月中旬での進路決定率は92.1%である。まだ活動中の生徒がいるので最後までしっかりと向き合わせたい。
- ・英語の外部試験利用により、上智大学に合格した。
- ・3学年でマナー教室を実施した。今後も継続したい。
- ・大石様より「肯定的な評価の目標85%を惜しくも超えることはできなかつたが、83.6%は良い数字だと思う。マナー講座は、とても良い取組だと思う。進路決定率が87%を超え、目標を達成できたことは素晴らしい。生徒の頑張りもあるが先生方のご指導の賜物だと思う」というコメントをいただいている。

○地域との協働

- ・外国につながりのある児童」が一定数在籍する小学校の授業見学を実施し、i-ROOMプロジェクトを立ち上げた。
- ・国際交流事業として、近隣の小学校に全学年から8名出向き、スペイン語やロシア語、ベトナム語、タガログ語で交流した。
- ・神奈川工科大学とも連携して、多言語翻訳授業を試行した結果、実用化へ向けた見通しが立てられたが、翻訳の正確さ・表示の時差などいくつかの課題も見つかつた。
- ・大石様より「i-ROOMプロジェクトは、愛川町全体の教育力向上に繋がる取組だと思う。今後が楽しみである。多言語翻訳授業の実用化へ向けた見通しが立てられたとあるが、まだ、改善の余地があるとのこと、今後も研究を進めていただきたい。」というコメントをいただいている。

○学校管理・学校管理

- ・80時間超の延べ人数はゼロだったが、時間外在校等時間が月45時間超の者は昨年延べ数55名だったが、2月末時点では延べ人数56名となった。
- ・不祥事防止の意識付けを徹底していく。
- ・当事者意識を持ち、職務に専念する。
- ・大石様より「一部目標を達成できなかつたとあるが、教員の働き方改革の流れの中で、一定の成果が上がっていると評価できる。不祥事防止の取組は、これで終わりというゴールはないので、継続していただきたい」とコメントをいただいている。

意見

- ・入学数が減少していて苦労していると思う。地域にとっては大事な学校である。
- ・数値での目標設定や達成度はわかりやすい。ただ、個々の思いは記述された文章でわかるものがある。

3 校長より

- ・学校目標はみんなが言えなければならない。3つのC 「C o n f i d e n c e (自信) C o m p l i a n c e (遵守) C o m u n i c a t i o n (対話)」を掲げ、分かりやすいものとした。だいぶ浸透してきた。
- ・女性職員が増え、女性職員の負担が減った。
- ・来年度はグループ編成を6グループから5グループに変更する。
- ・ストレスチェックを実施しているが、低ストレスの職場である。低ストレスの結果を見て、厚生課が来校した。
- ・職員の心理的安全が担保されている。
- ・ストレスによる療休が出なかつた。
- ・若い職員が多いが、育児休暇等が取りやすい環境がある。
- ・時間外勤務については、目標にしていた数値を越えた。将来的には20時間になるとも言われている。
- ・保護者の時間外対応への理解も必要である。
- ・教員不足も深刻である。本校も非常勤がつかずに苦労した教科がある。
- ・愛川町一体で部活動の外部委託、相互での活動も必要ではないか。
- ・校内DX化として8名の有志を募り、ワーキンググループを設立した。
- ・G o o g l e カレンダー機能を用いてスマホ上で月間行事予定を見ることができる。
- ・遅刻・欠席の連絡を電子化して、電話での連絡が激減した。
- ・ペーパーレスの会議を始めた。
- ・ただ、教員は紙からなかなか脱却できない。学習効果も紙の方が高い。
- ・電子黒板が導入された。非常によい。
- ・昨年夏に、パプアニューギニアに研修に行った。本当の日本語支援とは何か。漢字にルビを振ってそれが日本語支援になるとは考えにくい。
- ・i-Roomで神奈川工科大学と多言語翻訳について研究した。来年度は県から予算がつき、zoomの有償版を導入予定である。
- ・不登校生徒も増加している。出席至上主義からの転換が必要だと考える。

意見

- ・多岐に渡って教育活動をされている。連携事業も大切である。部活動があっても活動する人数、部員の少ないことが課題である。
- ・時間外の対応について対策が必要である。AIやメールなども取り入れてはどうか。仕事を精選していくことが必要である。
- ・生徒同士が多言語でコミュニケーションがとれるようになるとよいと思う。
- ・小学校からすると、高校は遠い存在である。部活動については、中学校だけでな

- く、小学校から交流して「地元の高校」という意識が芽生えたらいいと思う。
- ・大学でも外国につながる学生がいる。日本語での授業、特に専門的な用語等について苦労している。愛川高校の他、愛川町とも連携しているので、i-Roomの事業についても引き続き取り組んでいきたい。
 - ・（質問）外国に繋がる生徒はどれくらいか。
⇒数年前は600名中、100名位である。今は割合としては増えている。

閉会